

〔「水のめぐみ 大地のみのり」展によせて〕

東アジアの蔬菜図—瓜のモチーフをめぐって—

東アジアでは、自然の産物に様々な願いを込め、絵画工芸の意匠として表してきました。その中でも「瓜」は、中国最古の詩集『詩経』の中で「綿綿たる瓜瓞(かてつ)」（多くの実をつけ蔓を長く伸ばす瓜のように、子孫が繁栄し、永らく一族が続く）とうたわれ、おめでたい野菜として古くから愛されてきました。絵画においては、北宋(960～1279)以降「草虫図」という画題において、吉祥的な意味を伴って蝶や蜻蛉などと共に描かれる一方、在野の文人の志を象徴するモチーフとしても描かれました。身近な食物である瓜の姿に、人々が様々な想いを託したことが窺えます。それらは日本や朝鮮半島にも伝わり、瓜は広く東アジアで描かれる画題となりました。

本展観で陳列される瓜図の一つに、中国・明時代の「瓜図」(図1 個人蔵)があります。本展観が初公開となる本図は、野にあり蔓を奔放に伸ばし、実と花をつけた瓜の姿を墨一色で描きます。画面左の款記には、「万曆丁巳春日、写于百可齋中、有子裔君榮」「字用之」(白文方印)「平陰侯裔」(白文方印)とあります。この内容から、本図が万曆45年(1617)の春、百可齋なる場所で描かれたとわかります。作者は有君榮(字は用之)なる人物で、自らを孔子の弟子であった有若(前6～前5世紀。尊称は有子)の末裔と記しています。有君榮については詳らかでないですが、おそらく本業は儒者で、余技として画をなす文人画家であったとみられます。

本図は、墨の濃淡、滲みを効果

的に使うことで可能になる写実性や立体感にはあまり意識を向けず、モチーフを面的・線的に処理することで独特な表現を生み出しています。例えば画面中央の実は、画面の上から押しつぶしたかのような、丸みを感じない平面的な表現となっています。また葉も、ひるがえるさまに立体感はなく、枯れた葉先が、微妙に濃淡の異なる墨点を打つことでほろほろと崩れゆくかのように表されます。こうした形態のデフォルメは、ほぼ同時代に活躍した呉彬や丁雲鵬などの山水人物画にみられる、奇趣あふれる造形感覚にも通じるように思われます。一方、運筆は慎重かつ丁寧で、モチーフの一つ一つに入念に向き合ったことが窺われ、稚拙ながらも堅実な印象の作品となっています。

作者はこの瓜の画を、どのような想いで描いたのでしょうか。文人による瓜図を考える上で重要な人物に、元時代の文人画家・銭選(13～14世紀)がいます。銭選の瓜図の代表作として、今日「秋瓜図」(図2 台北故宫博物院蔵)が伝わります。本図はたわやかな実を結ぶ瓜が、雑草とともに野に生える姿を描いています。画面上に銭選の自題があり、その中で彼は秦の権力者であった東陵侯が、秦滅亡後には一市民として暮らし、長安城の東で育てた瓜を売ること生活の糧としたという、

有名な「東陵瓜」の故事に触れています。銭選もまた南宋の滅亡後、新たに元王朝には仕えず、在野の文人として一生を終えました。本図はそうした自身の境遇を東陵侯に重ねて描いたとみられており、画中の瓜は東陵侯のみならず、銭選自身の生き様のシンボルでもあるのです。自らの心情を託した銭選の瓜図は、元時代以降、文人を中心に人気を博し、墨戲などの文脈で瓜が描かれる契機になったとみられます。

有君榮の「瓜図」に話を戻したいと思います。瓜の図様は、長く描き継がれる中で定型の構図がいくつか生まれましたが、実は本図も、そうした定型の一つの系譜に位置付けられます。銭選の作と伝わる「三蔬図」(図3 台北故宫博物院蔵)は、画中に在野の瓜、茄子、そして白菜の姿を描きますが、「瓜図」の構図は、この瓜を概ね左右反転させたものと同じです(図4、図5)。「三蔬図」は明時代後期に制作された銭選の伝承作とみられますが、このような瓜の構図が「銭選風の瓜」の定型の一つとして、明時代には既に広まっていた可能性を窺わせます。左右反転となっている意味については不明瞭ですが、「瓜図」における構図選択の背景にも、銭選への敬慕があったことが推察されます。

更に「瓜図」における大地の表現に注目したいと思います。瓜とともに雑草が生えていることから、こ

がきちんと手入れされた菜園ではなく、手つかずの大地であることが窺われます。荒地に育つ蔬菜の姿は、俗悪な環境においても高潔であり続ける人物の寓意として描かれてきました。例として清の鳳臣(18～19世紀)筆「墨菜図」(図6 大和文華館蔵)は、雑草や茨が生い茂り、石の転がる荒地に根付く白菜を描きますが、これは宮廷において卑しい心をもつ同僚に囲まれながらも、清廉な志を保つ官吏の姿を表すとみられています。「瓜図」もまた和やかな雰囲気ながら、やはり同様の寓意が込められているとみさせるでしょう。

以上のことから、本図は吉祥的な意味以上に、尊ぶべき文人画家である銭選への想いと、官吏としての理想像が託された、いかにも文人好みの瓜図といえるでしょう。ただ、どこか雅趣から逸脱したユーモラスな画風を、本図が制作された万曆期(1573～1620)の時代背景—「奇想派」の画家達の活躍、出版文化の繁栄に伴う版画芸術の発展、雅俗の境を越えた新しい価値観の登場など—から解釈するならば、更に魅力的な瓜の姿が見えてくるかもしれません。(都甲さやか)

※図2は『大汗の世紀：蒙元時代の多元与芸術』(台北故宫博物院、2001年)、図3・4は『行篋随行—乾隆南巡行李箱中の書画』(台北故宫博物院、2017年)より複写いたしました。



図1



図2



図3

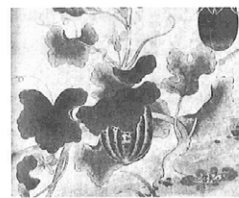


図4



図5



図6

季刊 美のたより No.209

令和2年 1月 5日

発行 大和文華館